
昏い道連れ

洸海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昏い道連れ

【Nコード】

N4558Y

【作者名】

洸海

【あらすじ】

一人前の神官戦士になるため、「しるし」探しの旅をしているという少年。その後からついてくる、正体不明の暗い影。行く先々で出会う人々の目を通して語られる少年の成長、そして影の正体は。和風異世界ファンタジー。サイトにはダウンロード版のみ置いてあります。残酷描写はたまに少しあるだけで、タグを付けるか付けまいか悩むレベル。

一 雨宿り（1）（前書き）

上代と室町だか江戸だかをこっちゃにしたような、なんちゃってジヤパニーズファンタジー設定です。神道用語や祝詞も多く出てきますが、現実の定義や用法とは別物としてご覧下さい。

一 雨宿り（１）

—

あんた、雷は好きかい？

俺は大好きだね。自分の名前に雷の文字が入ってるからつてもあるが、真っ黒な雲の中にひらめく稲妻の光は、他のどんなものより格好いいじゃねえか。犬や狐や、小胆な奴らが、こぞつて穴蔵に頭をつつこんで震えている遙か上で、雲を引き裂き、空を駆け抜ける。俺もあんな風に生きたいもんだ。

もつとも、そんな事が言えるのも、そいつが雨を連れて来ない場合だけだ。なぜかって、俺は宿なしだから。

たまたま屋根の下にいる時はいいぜ、自分は濡れずに見物してられるからな。だが、こんな風に野原の真ん中でいきなりドザーッと来られた日には、まったく！

「くそつたれ！」

文句のひとつも言いたくなるつてもんだ。空きつ腹に雨がしみるぜ、ちくしうめ。

右にも左にも、人家はまったく見当たらなかった。うち捨てられて荒れ放題の畑、ガマだの葦だのがぼうぼうに茂った湿地。その間を走るこの小道の先には、前の宿でおかみが言ったのが正しければ、そろそろ豊平とよひらの村が見えて来るはずだ。そしてそこには、妖あやし退治で日銭を稼ぐ俺みたいな流れ者に、仕事や情報を恵んでくれる周旋屋がある。

……はず、なんだがな。くそ、雨で行く手が見えやしねえ。ああ、腹へった。

手の甲で何度も目を拭ったが、後から後から滝のように雨水がしったり落ちて、何もかもがぼんやりとにじんでいた。

だから、道端に木立が見えた時も、俺はそこに誰か　あるいは

『何か』　がいるとは思わず、やれ助かったと木陰に駆け込んだだけだった。

「ああくそ、ひでえ目にあったぜ」

ぷう、と息をつく、水しぶきが散った。いやもう、頭のとっぺんから爪先まで、ずぶ濡れもいとこだ。どつからどこまでが自分の体で、着物で、草鞋わらじなんだか、わかりやしねえ。目ん玉まで流れちまってやしねえだろうな。

あれこれ悪態をつきながら、なおも降り続く雨を恨めしく見上げた時だった。

フツ、と後ろで何かが息を吐いた。その熱が体に届く前に、俺はぱつと振り返り、腰に差した刀を抜いた。

待ってましたとばかり、雪のような白い輝きがこぼれる。俺の商売道具にして唯一の相棒、妖退治のために神殿で清められた銘刀、月華。どんな妖だろうと、こいつの前には……

「つて、なんだオイ」

構えた刀を下ろし、俺は拍子抜けした声をもらした。薄暗がりの中にいたのは、紛らわしくも真つ黒の犬ところだったのだ。子犬と言うにはでかいが、まだ成犬おとなじゃない。クウンと甘えるように鼻を鳴らし、無邪気な黒い目でじつとこつちを見上げてやがる。

「びつくりさせんじゃねえよ、わんころが。腹がへってんのか？」

悪いな、俺もだ。おまえにやる物がありや、自分で食ってるよ」

やれやれ。俺はため息をついて月華を鞘に収めた。わんころはそれをじつと見つめ、それからおもむろに近寄ると、ふんふんと俺の手を嗅いだ。

「だから、何も持ってねえつつってんだろ。シッシッ」

別に犬は嫌いじゃねえが、こうもまとわりつかれちゃ、落ち着かねえ。追い払おうとしたのに、わんころはしつこく俺の臭いを嗅ぎ、前足でちよいと袂を引っ掻きやがった。

「ええい、食つちまうぞコラ！」

業を煮やして俺がわめくのと、

「クロガネ、戻ってこい」

子供の声が言うのが、同時だった。俺は犬を驚かそうとして両手を振り上げたまま、ぽかんとなって声のした方を振り向いた。

木立の奥の暗がり、ぼうつと白いものが浮かぶ。さては今度こそ妖か、と俺は警戒したが、じきに正体がわかった。白犬を連れた、白い着物の子供だ。見たところ十二歳かそこらだが、こんな所で何してやがるんだ？

黒犬は尻尾をくるりと巻き上げて、嬉しそうにそっちへ駆け戻って行った。小僧は黒犬の頭をちよつとなでてから、顔を上げてまっすぐに俺を見た。

「脅かしてごめんよ、おじさん。こいつ人懐っこくて、構ってくれそうな人を見付けたらすぐに飛んでっちゃうんだ」

「誰がおじさんだ、お兄さんと言え」

餓鬼から見りやおっさんでも、俺はまだ三十路のかなり手前だ。

見知らぬ餓鬼から小父^{おじ}さんなんぞと呼ばれるほど、老けちやいねえ。俺が唸ると、小僧は驚いたように目を丸くした。それからすぐ、面白そうに笑い出す。

「ごめん、お兄さん。俺あんまり、大人のひとの歳って分かんなくてさ。第一この天気での暗がりですの格好じゃ、おじさんでもおじいさんでも、区別なんてつかないよ」

笑われて俺は自分のなりを見下ろし、苦笑してしまった。確かに、薄暗い木陰にずぶ濡れの男がぬーっと立ってたんじゃ、人か化け物かも分からねえな。

「まあな。で、おまえさんはどこの誰だい。その装束ってことは、神殿の小僧か」

俺が何げなく問うと、小僧はふつと表情を消した。どうやら身の上についてちゃ、あんまり詮索されたかねえらしい。短い沈黙の後、小僧は作ったような明るい口調で答えた。

「元は深谷の神殿にいたんだ。でも、一人前になるには、外へも出なきゃいけないって言われてさ。探し物の途中なんだ。そうそう、

おじさんを驚かせたこいつは黒鉄、こっちの白いのは雪白。俺は真理だよ」

「ご大層な名前だな」

俺は呆れて二匹の犬を眺めた。わんころなんざ、シロクロでいいじゃねえか。気取りやがつて、さすが神殿育ちはお犬様も違うつてことかねえ。小僧に至つては真理サマと来る。ぺっぺっ。それはともかく、名乗られちゃこっちも黙つてゐるわけにやいかねえ。

「俺はライカ、雷の火だ。流れ者でね」

「うん、賞金稼ぎだね。さっきの刀でわかった」

けるりと言われ、俺は顔をこわばらせた。無理に笑みを作ると、口が半分がひきつる。

「おい小僧、長生きしたきゃ、その呼び方はするんじゃない」

「どうして？ 流れ者とか根無し草とか言うより、正しい呼び方だと思っけど」

きょんとした小僧の面を張り飛ばさなかったのは、ひとえに腹が減りすぎて怒りも長続きしなかったからだ。

「正しくても、俺たちはそう呼ばれるのが嫌いなんだよ。向かつ腹が立つ。特に神殿の奴に言われるとな。神官どもは、自分たちが妖退治するのは金のためじゃなく、里の人間を守るためだ、なんぞとぬかしやがる」

「だって本当のことだよ」

「大人が話してる間は黙つてろ。で、奴らがいちいちかまけてられねえ雑魚には、雀の涙ほどの賞金をかけて、俺たちみたいな腕っ節だけの荒くれ者が、日銭を稼げるようにしてやつてゐる、ってわけだ。飯の種をくれてやつてんだ、ありがたく思え、ってな」

大体があのだ連中は、神官以外の奴が妖と関ると、途端にクソでも見るような目つきをしゃがる。月華みたいな刀は妖を斬つて穢れが溜まるから、時々神殿へ持つて行って清める必要があるんだが、そんな時でも、絶対に正面からは入らせちゃくれねえのだ。

「ふうん。俺が聞いた話とはずいぶん違うね」

小僧は単純に不思議そうな顔をしてつぶやいた。俺はなんだか疲れてしまって、近くの木にもたれると、ずるずる座り込んだ。

一 雨宿り(2)

「何を聞いたんだか知らねえが、世の中は良い子ちゃんの耳に入る気持ちのいい言葉ほどには、きれいでも楽しくもねえって事さ」

ため息をつくと、腹の中に残っていた最後の空気までなくなつたような気がした。俺は小僧を見上げ、「おい、なんか食うもん持つてねえか」と投げやりに訊いた。

「ごめん。俺も昨日から何も食べてないんだ」

がつくり。俺は頭を膝の間に落とした。隣に小僧が来て、すとんと腰を下ろす。ちえっ、本当にこの二匹の犬を食ってやれたらいいんだがなあ。

と、小僧は何やらごそごそやって、胴乱どうらんから小さな物を取り出した。

「これぐらいならあるけど」

この際、口に入るならなんでもいい。俺はぱつと小僧の手に飛びついた。そしてふたたびがつくりする。木の皮じゃねえか。

「おなかは膨れないけど、少しは気が紛れるよ」

ほら、と小僧が言うので、何もないよりはマシかとその木っ端を受け取ってくわえた。しがんでいると、甘いような苦いような、妙な味が染み出てくる。確かに腹の足しにはならねえが、なんとなく飢えがおさまったような気がした。不思議なもんだ。

俺が骨をしゃぶる犬みたいにいじましく木の皮をかじっていると、横で小僧が勝手にしゃべりだした。

「俺がいた深谷の神殿ではね、賞金稼ぎには……あ、ごめん。流れ者には感謝しろって教えられたんだ」

「へーえ、そりやまた奇特なこった」

「神官の中でも法部に属する戦士たちは、いつも何人かで組んで妖退治をしているから、一人で勝手にあちこちに行くことは出来ないんだって。一匹二匹の小さな妖が悪さをしたからって、ちよつと行

って退治する、ってことが出来ないんだよ。そこで、おじ……お兄さんたちの出番だつてわけ」

小僧はそこまで言つて、俺が聞いているかどうか確かめるように、こつちの顔を覗き込んだ。ちえつ、まったく、なんて目をしてやがるんだか。純真無垢つてのはこういうのを言うのかね。

「知ってる？ 賞金稼ぎの中には、元神官戦士つて人も結構いるんだよ」

「そいつぁ初耳だな」

俺は思わず本気で驚いてしまった。小僧は得たりとばかり、にっこりする。

「きつとおじ……お兄さんみたいに神官を嫌う人が多いから、言わないんじゃないかな」

厭味な小僧だな、いちいち言い直すんじゃないやねえよ、ちくしょう。

俺は苦い顔で睨んでやったが、薄暗がりだから見えなかったらしい。小僧は気にせず話を続けた。

「でも俺たちはそういう人の話をよく聞くよ。人を守りたくて神官になったのに、まるで自由がきかないから、しまいに誰かを助けるために飛び出して行っちゃうんだつてさ」

「それが本当なら、神官も捨てたもんじゃねえがな。しかし俺が見てきた限りじゃ、神官なんざ、どいつもこいつもくそつたれた」

俺は言い捨てて、雨足の弱まってきた空を見上げた。さつきより明るくなつてきたようだ。これなら、もうじき出発できるだろう。今日中には豊平に着きたいからな。

小僧は、俺があんまり感動しなかったせいかな、ちよいとがっかりした様子で黙り込んだ。これだから餓鬼は嫌いなんだ、なんで俺がこんな気分にならなきゃなんねえんだよ？ 俺は弱い者いじめした悪党か？ 本当のことを言っただけだつてのに！ ああもう。

しょうがねえ。俺はため息をついて、小僧の話に調子を合わせてやった。

「まあな、おまえがいたような田舎の神殿じゃ、話は違うのかも知

れねえな。俺はだいたい、豊かな村や大きな町を回って、せこい妖
ばっかり退治してるからよ。そういう所の神殿はどこーんとでかく
て立派だから、神官の連中もお高くとまってやがるんだ」

「そうかもね」

小僧は言って、神妙な顔つきでうなずいた。やれやれ。

「おつ……雨がやんだみたいだな。んじやな」

俺は立ち上がると、口にくわえていた木の皮をちよいとつまんで、
「これ、ありがとよ」

礼を言ってからその辺にポイと捨てた。俺が歩きだすより早く、
小僧が慌てて立ち上がり、二匹の犬とそろって俺を見上げた。おい、
まさか。

「もう行くの？」

……待て。ちょっと待て、待てったら！ そんな目で俺を見るな
！ しかも三人がかりとは卑怯だぞ！

「勘弁してくれ」

俺はうめいて顔を覆った。冗談じゃねえ、てめえの飯もままなら
ねえつてのに、いきなり一人と二匹の食いぶちまで面倒見られるか
ってんだ。

苦悩する俺を見て、小僧はおかしそうな笑い声を立てた。

「待ってよ、俺まだ何も言っていないよ」

「言ったも同然だろうが、くそ、わんころまで一緒になって見つめ
やがって！」

「あはは、おじさん、犬好きなんだ」

「おじさんじゃねえつつつてんだろ！」

凄んで見せたが、効果はなかった。ごめんごめん、なんて言いな
がら、小僧はけたけた笑ってやがる。

「はあ……まったく。あの子、俺はこれから豊平に行つて、周旋屋
で仕事もらつて、それを片付けなきゃ飯一杯にもありつけねえんだ
ぞ。ついて来たつて、いい事なんざなんつにもねえんだぞ」

「心配しなくても、俺だって妖退治に手を貸せるよ。こつ見えても

一応、神官としての修行は積んでるからね。簡単な法術は使えるし、剣も持つてる。雪白と黒鉄も戦えるよ」

「どうだかな」

俺は胡散臭い気分で二匹の犬を見やった。黒助の方は相変わらず機嫌良さそうに、尻尾を小さく揺らしながら無邪気に俺を見つめている。白い方は逆に、俺を値踏みするような目付きをしゃがった。何様のつもりだ、このわんころが。

「どっちにしるおまえらの行き先も豊平だつてんなら、しょうがねえ、ご一緒するさ。けど、いいのか？ 何か探し物してるんだろ」念のため小僧に確かめると、なぜだか小僧は急に曖昧な顔になってうなずいた。

「うん、いいんだ。どこにあるのか、はっきり分かってるわけじゃないから」

「……へえ？」

いったい何を探してるってんだ？ ちょいと気にはなるが、どうせそう長く一緒にいるわけでもねえだろうし、俺の知ったこっちゃねえな。

「じゃ、日が暮れちまわねえ内に行くか！」

景気づけに威勢よく上げた声に調子を合わせ、疲れた足を励まして歩きだす。

少し進んでから、俺はふと何かが気にかかり、ちらつと後ろを振り返った。小僧とわんころはしっかりついて来ている。どうやら、空腹のあまり木陰でまぼろしを見た、という都合のいい話にはなつてくれねえらしい。

（しかも……なんか余計なもんまでいやがるぞ）

俺は何も見なかったふりで、また前を向いた。だが間違えようもなく、俺たちのずっと後ろに、そこだけまだ雨が止んでいないかのような暗がり、うっそりと佇んでいた。

振り向かなくても分かる。そいつは、俺たちを黙って見送り……それからゆっくり、後を追って動き出すのだ。

妖とは少し気配が違う。今のところ悪さをする様子もない。下手につついて招き寄せるより、放っておきや自然に離れてくれるだろう。たぶん。

（でなけりゃ、こいつの出番ってただけだ）

俺は左手で月華の鞘を握り、そうならないことを祈った。この刀であいつが斬れるかどうか、ちよいと自信がなかったからだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4558y/>

昏い道連れ

2011年11月16日03時16分発行